

# カーリダースの物語

## ジュリアン・エルファー

何世紀も前、現在のインド、マッディヤ・プラデーシュ州、ウッジャイン近くの小さな村の外れに、ただダースとだけ呼ばれる一人の孤児が住んでいました。その子は幼い頃に親切な年老いたヤギ飼いに引き取られ、ヤギについていろいろ学ぶようになり、やがてヤギの群れの世話を引き継ぎました。彼は、ひととき美しい若者に成長し、飾り気のない無垢(むく)な物言いと物腰で、村人たちに愛されていました。特に村人たちが心引かれたのは若者の心の純粋さで、それは彼のヤギに注ぎ込む愛と、うっとりするような優しい歌声に、はっきりと表れていました。

この時代、この王国の支配者は、ヴィクラマディティヤ王でした。彼の一人娘であるヴィディヨーッタマ王女は、その圧倒的な美貌と聡明さで有名でしたが、誇り高く高慢に成長して、自分の知性に匹敵しない男性とは決して結婚しないと宣言しました。

王は娘に、子どもの頃の彼女の学友だった優秀な学者であり高潔な首相、そして彼女に報われぬ思いを寄せているヴァラルチと結婚してほしいと、何度も何度も懇願しました。しかし、王がこの要求をするたびに、王女は拒否しました。

とうとう最後に、王女の主張によって、ヴィクラマディティヤ王は望ましい結婚相手を見つけるための計画に同意しました。王は、王女と夫候補との間での公開討論会を数多く催しました。これらの討論会は当然、いずれも王女の勝利で終わり、失望した候補者は頭を垂れてこっそりと立ち去りました。

このすべてを通して、ヴァラルチは、心をさいなむ拒絶の痛みを和らげるすべを見つけることはできませんでした。ある月のない夜、彼は幾ばくかの持ち物を集めると、宮殿から逃げ出しました。何週間も歩き、自分を襲った病を忘れようとして当てもなくさまよい、疲れ果てると、どこであれ寝ました。

ある朝早く、ヴァラルチは、ちょうど頭上の空から聞こえるギコギコという奇妙な音で目が覚めました。見上げると、全く信じられないことに、若い男が木の枝にまたがり、あふれんばかりの喜びでその枝をノコギリで引いていました。ただし、若者は枝の根本にノコギリを当てていて、落下して首の骨を折ることは間違いないことでした。

「おい、愚か者！」と、ヴァラルチは叫びました。「何をしているのだ？ 死ぬつもりか！」

割り込んできた声に驚いた若者は顔を上げ、大きくにっこりしました。「ヤギのためだよ！」と簡単に答え、危険には気づいていないようでした。

「違う！ 私の言いたいのは…」と、ヴァラルチは言いかけてましたが、時すでに遅し。ノコギリの最後の一引きで、枝は折れ、ヤギ飼いは地面に落下しました。次の瞬間、彼はさっと立ち上がり、枝を戦利品のように振って笑っていました。

「ヤギのためだよ！」と、彼は前と同じく愉快そうに繰り返しました。

ヴァラルチは仰天して若者を見ました。愚かなことをする男だと叱りつけようと思いましたが、若者の大きな輝く目には、何かがありました——それは、意表を突くユーモアと感受性でした。

瞬時に、ヴァラルチはある計画を思い付き、それがあまりに完璧だったので、爆笑して若者の肩をたたきました。

「名前は何というのだ？」

「ダースです、旦那様」

「素晴らしい、ダース！ 王様は君に宮廷に来るよう命じている」

ヤギ飼いは心配そうに周りを見回して、胸をかきました。

「でも、ヤギが…」と、彼は少し悲しげに答えました。

ヴァラルチは何食わぬ顔で手を振り、ダースを道路の方に押しました。

「私の言う通りにやるのだ。そうすれば、お前にとってもヤギにとっても、すべてうまくいく」

3日後、遠方広くから民が集まり、宮廷の大ホールに群がりました。というのも、ヴァラルチが国中に先触れを送り、謎の、類いまれな学者が思いがけなく現れ、王女に挑戦すると発表したからでした。彼の出自は誰も知りませんでした、いろんな話が広まっていた。かつては神童だったとか、いわゆる知識というものにだんだん幻滅を感じたとか、ついには壮大なヒマラヤ山脈に引きこもって深遠な沈黙の力を獲得したとか。だから、王女とは完全な侵されざる沈黙によってのみ討論をするであろう。どうしても必要とあれば、身振りを使って話すであろうと。

ダースが宮殿に入ると、群衆は静まり返りました。王女は、ホールの一番端に鋭い目をして静かに立ち、討論相手を観察していました。ヴァラルチは、ダースをラージャ、つまり族長のように装わせていました。ヤギ飼いは、ぜいたくに刺しゅうされた足首まであるコートを着て、宝石がちりばめられた上靴を履き、頭には最高級の紫の絹のターバンを巻いていました。彼が前もつ

て指示されたことは、討論中、何があっても決して言葉は発しないこと、そしてただ自分の心に思い付いた動きに合わせて演じるだけで、結果がどうなろうと気にしないということでした。その日の終わりには、ダースは王族のように、今まで想像したこともないようなごちそうを頂くことになっていました。ですから、ダースは純粋な感嘆と好奇心をもって、ホールの中央にくつろいで準備万端で立っていました。

王女は賢そうな目で隅々までじっと食い入るように見詰めながら、彼に近づきました。かなり間を置いてから、彼女は指を1本立てました。ダースは2本の指で応じました。王女はまさにそのような応答を予測していたようでした。というのも、すぐに3本の指を上げたからです。ダースは考えるための間を取り、手を口に当て、わずかにため息をつきました。彼は肩をすくめて4本の指を立てました。それを見て、王女は勝利を確信して、勝ち誇ったように彼女の右手の全部の指を上げました。しかし、ダースは胸の前で腕を組み、頭を激しく振りました。真正面から王女を見て、彼はいきなり右手のこぶしを左の手のひらに落とし、それから追い払うように両腕を振りました。王女は青ざめ、敗れたように見えました。大層長い時間がたったように思われた後、彼女は穏やかに言いました。

「負けを認めます。あなたは確かに私の知る最高の学者です」

集まっていた群衆は大喝采しました。ヴィクラマディティヤ王が安堵の涙をぬぐうのを見て、ヴァラルチは深く満足すると共に冷笑を浮かべました。

さて、王女の心の中では、論争は次のように展開されたのです。1本の指で、彼女は真理は一つであり不可分であると主張しました。美しい賢人は彼の2本の指を上げ、彼女に二元性を説明するよう求めました。するとすぐに、彼女は三つのグナを明示しました。確信をもって、彼は四つのヴェーダの永遠の英知を意味している4本の指を上げて応えました。少なからぬ自己満悦と共に、彼女は片手を全部上げ、大いなる自己を隠す五つの覆いで反論しました。する

とこの賢人は、比類のない確信を持って握りこぶしを開いた手のひらに落とし、王女のマインドとエゴが最終的にその無力さを受け入れた時にのみ、彼女は身を委ねて真理を悟ると、すべての人に分かるように明言したのです。その瞬間、彼の視線はあまりに純粹で鋭いものであったので、彼女は自分の心が頭に打ち勝ったことを知りました。彼女はこの精神的に熟達した勝利を全く否定することができませんでした。

ダースはというと、彼はただ計画に従い、後続くごちそうを心待ちにしていただけでした。ですから、王女が指を1本立てた時、ダースは彼女が討論の褒美にローティー——彼が大好きなパン！——を1枚、と示していると考えたのです…彼のそれまでの骨折りを考えると、これは少しけちくさく思えました。それで彼は、少し駆け引きしてもいいなと思いました。なぜなら、彼は疲れておなかがすいていたし、言われたことはすべてやったのですから。彼は2枚なら手を打つことができると言いました。ゲームは進行していきました…しかし、王女が5枚のローティーを提案した時…そう、それはただ不作法で欲深で、そんなにもたらふく食べた人は厳しく叱責されて追い払われるべきだということだったのです。

結婚式は、その都の住民がかつて見たこともないような鳴り物入りで行われました。しかし、ヴィディョーッタマ王女が策略を見抜くのにそれほど時間はかかりませんでした。とうとう新郎と二人きりになると、この知的な巨人が宮殿の庭で跳ね回り、子どものように木からぶら下がり、歌を口ずさんで時を過ごすことに彼女は気づきました。思慮深い会話を交わそうとする彼女のすべての試みは、あいまいな笑いで迎えられました。

ヴァラルチが、彼の愛に対して彼女が無関心だったことに対する復讐(ふくしゅう)として、巧妙に愚か者を押し付けたのは痛いほど明らかになっていきました。そして彼女は、ヤギたちに囲まれた生活について愛と情熱をもって話す美しい若者に心から温かい好意を感じる一方、彼女の自尊心はあまりにも深く傷つきました。もはや内側で煮えたぎる怒りを抑えられなくなった時、彼女はダースの前に立ち、ヴァラルチの復讐心に満ちた計画の詳細を暴露しました。ダー

スが自分の言っていることを理解するのに苦労しているのを、彼女は後悔しながら見ていました。やがて彼は肩をがっくりと落とし、顔からは生気が失われて青ざめました。次の朝、彼はなくなっていました。

ダースは王女が口にした厳しい言葉を内側に反響させながら、夜の闇に逃げ込みました。たった数時間前には、ヤギ飼いのダースは奇妙でおかしな冒険に身を置いていました。しかし今彼は、自分が残酷に欺かれて、愚か者を演じさせられていたことを理解しました。彼は、この国ではよそ者で、哀れまれ、あざ笑われていました。純真で心優しいダースは、なぜ人がそんなに意地悪なのか理解できませんでした。

木々が夜明けの薄明かりに影を落とした時、しばらく降っていた穏やかな小雨が本降りになりました。野原の少し遠い所に、デーヴィーの寺院が見えました。それは堅牢で人の訪れもなく、招いているようでした。もしかしたら女神が彼に慈悲をかけてくれるかもしれません。涼しく、洞窟のような内部では、祭壇に一つのギーのランプが揺らめいていました。すべては静かで平和でした。彼はしばらく立って、彼を包んでいる静けさに耳を傾け、長い息をつき、平伏して、泣きました。彼の混乱と内なる動揺は、彼の心から込み上げてきた女神への一つの祈りに集約されました。「おお、大いなる母よ！ 私は何者なのでしょう？」

彼が逃げ込んだこの寺院は、女神カーリーを祭るものでした。女神はいつものように誰もいない夜明け前の時間に散歩していました。戻って扉を開けようとした時、内側からかんぬきが掛かっていることに気づきました。

「そこにいるのは誰？」と、彼女は大声で叫びました。

中から引きずって歩く音とくぐもった声がしました。そして再び全く静かになりました。

「誰かいる？」と、彼女は再び叫びました。すべてが静かなままでした。それから彼女は3回ノックし、夜明けの静けさに響く力強い声で「扉を開けなさい！」と強く要求しました。

今回の反応は明白でした。

「向こうへ行って！ お願いします！ 放っておいてください！」

シュリー・カーリーはその声を覚えていました。その声を以前に聞いたことがありました。恐怖と混乱の下に、過去生において深い崇拜と長年の奉仕をささげてきた信奉者の固い献身と純粋な熱望を、彼女ははっきりと認めました。女神は、運命と偉大な功德がこの出会いを用意したと分かりました。

「ああ！」 彼女はそっとつぶやきました。「だからおまえは来たのね」

扉に身を寄せて、彼女は言いました。「私に顔を見せなさい」

扉の向こう側で人が動くのが聞こえ、そして彼女は優しく言いました。「カーリーにあなたの舌を見せなさい」

内側では、ダースは彼女の言葉に応じざるを得ないと感じました。恐る恐る、彼は扉を開けて、その隙間から舌を突き出しました。無限の配慮と慈悲をもって、女神カーリーは指を伸ばして彼の舌にマントラを書きました。

その瞬間、ダースには、彼女が彼の口に真っ赤な石炭を置いたように感じられました。彼は畏敬の念で立ちすくみました。記憶の束が夢のようなおびただしさに浮かび上がりました。想像を絶するほどの広大な旅が、彼の背後に広がっていたのです。彼は、貧困も富も、無名も名声も、知っていました。しかし、何度もの生涯において、彼はデーヴィーに加護を求め、純粋な心

で彼女に仕えてきたのです。無数の生涯の膨大なタパシヤーが、彼の内側の目の前で一瞬のうちに繰り広げられました。

彼の口からその光が、息よりも素早く喉元や心臓や腹へ動くのを見て、汗がにじみ出てきました。彼は、話したい、または歌いたいという衝動に駆られました——どちらがしたいか分かりませんでした。彼が知っていたのは、もしも始めてしまったら、それには終わりが無いということだけでした。輝く鮮明さをもって、音——サンスクリット語の文字や言葉——という形で内側から放たれる神聖な靈感、そしてその光の球から恍惚(こうこつ)として踊り出す数々のイメージも見ました。彼は、生命にその力を与えるのはこれらであると分かりました。彼の内側で歌っていたのは女神でした。それは比類なきものでした。

彼が目を開けて、涙を払おうと目をしばたたかせると、女神カーリーが彼の前に立っていました。彼女は同じ神聖な輝きで光を発し、その顔は愛情で輝いていました。彼女の笑い声は至る所からやって来るかのようでした。「ああ」と、彼女はため息をつきました。「カーリダース！」

そしてそのように、無学だが心の純粋な若いヤギ飼いは、女神の神聖な恩恵によって伝授を受けました。そしてその後の数年間、彼はひたむきな集中と高まる情熱をもって、自発的に繰り返され内側で深まるそのマントラに耳を傾けました。昼夜を問わず、一人でいても仲間といっても、彼のマインドはその崇高な振動に夢中になったままでした。彼の内側で長い間沈黙していたものが、今、声を見いだしました。そしてこの声がカーリダースを、詩人、劇作家、才気あふれる廷臣、また、インドのどの時代においても最も著名な恍惚とした詩人の一人となることに導きました——彼は「マハーカヴィー、偉大な詩人」という異名を得るようになったのです。

